

Anatomy as a Basis for Clinical Medicine, Second Edition

E. C. B. Hall-Craggs 著

Urban and Schwarzenberg, Baltimore-Munich, 1990

本書は1985年に出版された初版の改訂第2版(1990年)である。初版で著者の意図しているところは、膨大な解剖学の領域を学生が自習できる範囲で、しかも関心がわくように記述するとともに、臨床医学の基礎となることを中心にまとめたということ、第2版でもそれは継承されているという。

本書は9章から構成されている。第1章は人体解剖学の最も基本となる事柄についてそのアウトラインを系統的に述べており、本章を理解すれば次章以降のどの章を読むのにも準備ができていようとしている。第2章以降は局所毎に記述されており、背部と脊髄、上肢、胸部、腹部、骨盤、会陰、下肢、さらに頸頭部の合計8章よりなっている。各章は皮神経と皮静脈、脈管、神経、内臓など、その局所における構造とそれらの相互の関係について述べている。さらに必要に応じて機能解剖や疾患との関係に触れている。図は多色刷りで、わかり易い写実的な模型図である。またX線像のほかに、CTやMRIなどの新しい画像が随所にみられる。

解剖学の教科書には、オーソドックスで古典的なものが、従来よりそれぞれの特徴をもって数多く発行され、改訂を重ねて多くの医学生に親しまれ、各時代でそれなりの役を果たしてきた。それらの本における記述の仕方は系統的で、大部で、ある場合には3分冊よりなっていたりする。最近の医学は多様化するとともに知見は飛躍的に増大し、医学生の学ぶべき内容は量質ともに増加しているが、教育期間は従来通り限定されている。その結果、各科目に割当てられた時間は大幅に削減されている。解剖学では講義の内容は大幅に圧縮し、主力を解剖学実習に置く傾向にある。そこで学生自身には、実習を行いながら、自習することのできる教科書が要求されることになる。実習は系統的というよりは、局所を中心に行うので、局所解剖学的に記載した教科書が必要なわけで、最近の教科書はこの傾向に沿って書かれたものが多い。

そのような最近の教科書の中でも、本書の内容はよく整理されており、局所から全体を理解できるような工夫がなされている。また本書は、実用的で、実際に役立つことがよく咀嚼されて記述されているので無駄が少ない。形態学の教科書には図は不可欠であるが、本書の図は清楚な印象を与え、またオリジナルな視点から描かれたものが多く、教科書の内容をわかり易くしている。重要事項の簡潔で明解な記載は、適切な図とともに解剖学を親しみ易く、またその学習を格段に容易にしてくれている。量的にも過不足がなく中程度の厚さをもっており、医学生の基礎知識として妥当な範囲と思われ、自習用にまた実習室で役立つ良書であるといえる。また文章は平明でわかり易く、日本人学生にも教科書として推薦することができる。

(解剖学第一 嶋田 裕)

[千葉医学 67, 126, 1991]